

絢瀬絵里生誕祭2020

『シュウヤ』

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

絵里ちハッピーバースデー！

絢瀨絵里生誕祭
2020

目

次

1

絢瀬絵里生誕祭2020

「絵里ちゃん！」

お昼休み、廊下の奥から全速力で駆けてくる人影。絵里がその声に振り向いた時には、

「お誕生日おつめでとうにや～！」

全力のハグが飛びついてきた。

なんとか倒れないように踏ん張った絵里の視界には、キラキラとお目々を輝かせた可愛い後輩の笑顔。

大声を上げた事と廊下を走った事といきなり飛びついてきた事のどちらから注意しようか悩んだ絵里は、

「あ、ありがとう……」

結局それだけを口にした。

「絵里ちゃん、放課後になつたら校門で待ち合わせね！ 一緒にラーメン食べに行くにや！」

ようやく離れた凜は、それだけ伝えると再びダッシュでその場を去っていく。

「え、ちょっと凜!!?」

「約束だからねー！」

呼び止める間もなく。小さな後ろ姿はすぐに見えなくなつた。

「…………」

中途半端に手を伸ばしかけた状態で固まつた絵里は、

「ラーメン……」「生徒会長がお誕生日にラーメン……」「もしかして大好きなのかな」

周囲の生徒へあらぬ噂が広まっていくのを感じた。

放課後。言われた通り正門へと向かう絵里。すでに相手はそこで待つており、絵里の姿を見つけるとパツと明るい顔で駆け寄つてきた。

「絵里ちゃん！ 来てくれたんだね！」

「約束されちゃつたもの。ちゃんと来るわよ」

「良かつた。あの時返事を聞かずに戻っちゃつたから、もしかして聞こえてなかつたかもつて思つて……」

そつちか。絵里は思つたが言葉には出さなかつた。

「ところで、一体どうしたの？誕生日をお祝いしてくれてるのは、何となく分かるけど……」

自分の記憶を遡つても、ラーメンが食べたいとぼやいた記憶は無い。誰かに訊かれた記憶も同じ。

「……絵里ちゃん、ラーメンつて知つてる？」

「バカにしてるのかしら」

「ち、違うよ!!？」でも、ハンバーガー知らなかつたり。プリクラ初めてだつたりしたからもしかして……って

「うつ……」

それを言われると、絵里も言い返せない。この子達の常識が、自分にとつて未体験だつた事も多いのだ。

「絵里ちゃんつて、生徒会長だし、頭もいいでしょ？美人だし、綺麗だし、オシャレだし凄く大人っぽい」

唐突な賞賛に、絵里は戸惑う。そんな事ないと否定してみるも、効果は薄かつた。

「だから、絵里ちゃんが欲しいモノとか全然分からなかつたんだにゃ」シユン、と顔を下げる凛。絵里はどう声をかけたものかと悩んだが、

「——だからね！」

今度は勢いよく顔を上げてくる。

「凛、考えたの！かよちんが楽しそうな時つて、凛も楽しくなるの。だからきつと、凛が楽しくしてれば絵里ちゃんも喜んでくれるんじやないかつて！」

「……」

呆気にとられた絵里だつたが、

「——ふつ……」

堪えきれず吹き出す。

「えつ、ええ!?」

やつぱり変かにや!?」

「そんな事ないわ。素敵な考え方だと思う」

「じゃあ何で笑ったにや……」

「いつも凛が無意識にやつてる事を、真剣な顔で話してくるんですけどの。ついおかしくて」

「ええつ!?」

凛、いつも今日みたいな事してるの!?

頑張つて考えたのに……」

うなだれた凛の頭に、笑顔のまま絵里は手を置く。

「それが凛のいい所じゃない。元気いっぱいの笑顔を見せてくれるから、私の暗い気持ちも吹き飛ばしてくれるのよ?」

「ホントに……?」

「勿論よ。私が嘘をついた事なんてないでしよう? ——さ、この後は凛が私を楽しい気持ちにさせてくれるんでしょ? あなたが笑顔じゃなかつたら意味ないわよ?」

「そ、そつか……」

凛は一度大きく深呼吸すると、笑顔で絵里の手をとつた。

「それじゃ絵里ちゃん! ラーメン食べに行つくにやー!」